

「平成20年度ふじやま古民家部会「大師道・川崎宿・総持寺、生麦事件碑」・「よこはま古民家」とその

周辺歴史散策 平成19年10月企画 原本

第二十八回本郷ふじやま公園古民家歴史部会歴史探訪(川崎宿3の1 六郷渡し場・大師旧道・川崎大師)

平成20年4月3日(木) (集合; 京浜急行線「京浜川崎」駅横浜寄改札口10時)

行程; 川崎駅→六郷畔→大師道→競馬場→レコード発祥地→医王院→東日本電車発祥碑→川崎大師。

1・東海道と大師道

東海道、江戸から京都までの道のりは百二十五里二十町(約5百2km)。家康により、街道の整備が行われ、五街道、特に東海道は重視され、1601(慶長6)いち早く伝馬制が敷かれ、既に発達していた多くの集落は、そのまま宿駅に指定され、川崎宿のように、他の宿より遅れて1623(元和9)、新しく「町だて」してから宿場となったものを合わせ、東海道五十三宿が整うのは、参勤交代制が確立する1635(寛永12)頃のこと。

川崎宿開設後は厄よけで知られ、江戸から日帰り出来る川崎大師は関東屈指の霊場として大いに栄え、旅人はもちろん多くの参詣者の往来で、大師道は賑わいを見せました。幕末はやり歌「川崎宿で名高い家は、万年、新田屋、会津屋、藤屋、小土呂じゃ小宮…」なかでも万年屋とその奈良茶飯は有名だ。

川崎宿の家並; 旅籠62軒をはじめ八百屋、下駄屋、駕籠屋、提灯屋、酒屋、畳屋、湯屋、鍛冶屋、髪結床、油屋、道具屋、鋳掛屋、米屋など合計368軒(文久3年、1863宿図)。

2・新宿町

東京新宿; 甲州街道に新しく出来た宿同様、川崎宿町だての新宿町は砂子、久根崎間の宿場の中心的町。川崎宿を構成していた四町(小土呂・砂子・久根崎・新宿)の内、砂子は今も地名として残り、小土呂・久根崎は「バス停」や「交差点」にその名を留めるのみで、かつて、大層振るった町「新宿」の名を見出す事は困難。

3・万年屋跡・六郷の渡し・旅籠街・長十郎梨のふるさと・川崎大師の灯籠と明治天皇渡御碑(明治元年東下時)

○万年屋; 大豆、小豆、栗などを入れて炊き込んだ奈良茶飯が名物。

○六郷の渡し、旅籠街; 江戸初期に架けられた六郷大橋は、千住・両国と並び、江戸の三代大橋と呼

ばれたが、洪水で流され広重の浮世絵にある渡し舟の時代が二百年続く・渡しを越えると川崎宿、弥次さん喜多さんも腰をおろした万年屋が特に有名。

○長十郎梨のふるさと；明治中頃、大師河原村の当麻辰次郎が作った新種は病害に強く甘みがあり、後にその屋号を取って「長十郎」と名付けられた。

4・万年横町・大師

万年横町名由来、万年屋に近かったからの様で、万年橋もあった。万年横町の入口には「従是弘法大師江之道」と彫られた石の道標があり（現在川崎大師境内移設）、大師への道は白酒・饅頭・果物（戸板）・土産物屋があった。

5・富士紡績・競馬場・味の素本舗鈴木商店

明治末期当時、川崎競馬場建設するも、社会問題から馬券発売禁止令、完成後わずか2年で廃止。跡地に東洋1の紡績工場「富士紡績」（大正4年・2千人・大正5年頃の富士瓦斯紡績、給料、男30銭、女60銭、1日12時間2交替）が建ち、昭和14年東芝に買収され、第二次大戦で焼失・跡地に再び競馬場建設現在に至る・味の素本舗鈴木商店川崎工場操業開始大正3年、池田菊苗（カネエ）博士「味の素」発明、特許を得たのが明治41年。

6・レコード製造の始まり

蓄音機の輸入、明治10年（エジソン発明1年後）・商品としての輸入20年後・蓄音機輸入商「日米蓄音機製造株式会社（日本蓄音機商會に合併現在日本コロムビア）」を設立し、レコード製造開始される。久根崎に川崎工場竣工したのが明治42年、川崎に進出した近代産業の草分け的存在。

7・消えた地名「久根崎・クヅキ」

宿場の仕事を受け持った町だが、河原に出来た集落だけに、安定収入もなく振るわなかった。近代に入り逆に水運その他の条件から工業用地として着目される事になる。大正13年市制施行を境に町名としては消えた。

8・医王寺（天台宗・薬王山無量院・本尊、薬師如来・鐘楼、享保10年・池・地藏・菩提樹由来、中国、桑科）

医王寺の池に住む、カニ・魚が火災の中から鐘を守った伝説・昔、瘡（できもの）で苦しんだ村人が、

地藏の躰に塩をこすり付け、祈った処、すっかり良くなった。人々は次々と塩をこすり付けた。何時しか地藏の躰は塩で解け今のように骨だけの姿になった伝説。

昔、「蟹は水神様お使いで、幸せを授けて下さるのじゃ。いじめては、なりませぬぞ」崇めてきました。

9・大師道・観音道・石観音（川崎区観音2－16）

旧大師道、川崎大師の中間地点に昔三叉路があり、そこに、「左大師道、右観音道」と刻まれた石の道標があった。参詣客は左、若宮八幡経由で大師へ・右、石観音へ。

石観音堂；寛文5年（1665）天台宗明長寺の僧弁融によって開かれた。本尊は石造り如意輪観音像・境内には、霊亀盥盤（レイトン・タイ・享保18年、1733）霊亀の助けを受けて地元漁師達が海中から引き上げたと言う手水石・石観音六句碑は1747、延享4、県内最古の句碑・独吟万句詠草塚、1晩、1日の句詠の数を競う矢数独吟地元俳人の記念碑等の文化財。

10・東日本初の電車

京急大師線；「陸蒸氣・カヅヨウ」開通明治5年、川崎駅から大師参詣客に着目、何人かの資本家が「川崎電気鉄道敷設特許請願書」政府に提出明治29年、六郷橋—大師停留所間「大師電気鉄道」（路面・昭和3年迄）明治32年正月の事。京都・名古屋に次いで、東日本最初の電車、川崎大師駅前に発祥の地記念碑。

11・大師新道・花見橋（大師駅近くの掘りの流れに架かっていた、花見名所の橋）

大師新道、明治22年川崎大師が土地買収費用負担し造った道路。六郷橋畔から大師駅間約2 Km。

12・千蔵寺（清宝院・本尊鬼）

元禄元（1688）以前から地元寄合所、旅人の宿、寺子屋、眼の平癒祈願・鬼面の本尊インド熱病除。本尊が鬼と言う事で節分会の際は「鬼は内、福は外」と豆を撒き、暗くしたお堂に世間の悪い鬼を集め改心させ、良い鬼にして再び世間に返すという、珍しい法要が行われる。但し、この日は、鬼以外は訪問出来ない。千蔵寺は、天保年間（1830～44）に東京で創建されたもので開祖は羽黒山の修験僧。明治半ば、たまたま清宝院に逗留した住職がこちらに寺を移したという。

13・金山神社（若宮八幡＝多摩川に治水祈願干拓事業守神、仁徳天皇祀る・境内に金山神社）

祭神は、性と鍛冶屋の神とされる「カナマラヒコ・カナマラヒメ」の夫婦神で、俗に「かなまら様」と呼ばれている。祭礼は4月15日で、松の木でつくられた大きな陽物（ヨブツ・男根）が街をねり歩き、行列の後には、面をかぶり身ごもった姿の「面掛け行列」が続く。11月8日には、「ふいご祭り」が行われ、各種の刃物が奉納され、工場経営者や金物商を営む人々で賑わう祭礼。

14・明長寺（天台宗・恵日山普門院・東海三十三所第二十四番観世音・本尊十一面観音立像、慈覚大師＝円仁作）

1669（寛文9）雷火にあい、堂宇・記録が失われ詳細な縁起は不明だが、永正年間（1504～21）には存在したらしい。1766（明和3）7世良逢が寺を再建、隆盛に向かった。明長寺には、辻ヶ花染という、室町期から江戸初期にかけて流行した絞り染めの特色をあらわす「葵梶葉文染め分け辻ヶ花染め小袖」（国重文）が所蔵されている。（非公開）伝承によれば、荻田主馬（シメ）が大阪の陣（1614～15）の功により徳川家康より拝領したものと言う。

15・川崎大師（真言宗智山派、大本山金剛山金乗院平間寺＝ヘゲンジ・開祖尊賢上人・海苔づくり・大師道標・自動車交通安全祈禱殿平成18年紙新築移転・旧祈禱殿跡に開創880年記念薬師殿開設工事中、現山門樓上薬師如来遍座）

総本山は京都東山七条、智積院。1127（大治2）、漁夫の平間兼乗が、夢の中でののお告げにより、海中より弘法大師像（現本尊）を拾い上げ、これを安置する堂を建立したのが始まりであると縁起が伝え、その頃、尊賢上人が諸国遊化の途上兼乗のもとに立ち寄られ、尊いお像と、此にまつわる靈感奇瑞（キズイ）に感泣（かきり）し、1128（大治3）一寺を建立し、兼乗の性・平間（ヒマ）をもって平間寺（ヘゲンジ）と号したとあるが、実際の創建年代は不明である。

1141（永治元）鳥羽上皇より勅願所の列にくわえられたと言う。16世紀には、弘法大師信仰の霊場として相当賑わいを見せたと推測され、江戸時代の川崎宿の繁栄は、川崎大師の隆盛と密接な関係をもっていた。

現在の本堂は鉄筋コンクリート造り、平安期の建築様式に近代的な感覚をもちこんだ大伽藍で、昭和39年落成。不動堂・大本坊・中書院など、すべて昭和に入って建立されたものである。境内の銅鐘は1795（寛政7）年の銘がある。大師道に立てられた道標、芭蕉や高浜虚子の句碑等、数々の石像物など貴重

なもの多い。大師地区では門前町としての生業の他、海苔造りが盛んでした。農閑期の副業が本業に変わり、戦後は浅草のりの大半をまかなったこと程でした（昭和47年百年の歴史を閉じる）。

八角五重塔（中興塔）；八角は最も円に近い建造物の形と言われ、「包容力」「完全性」が象徴されている。又、「八正道・八聖道」（釈迦の説法修業基本8種の実践徳目；正見＝見解・正思惟（セイイ）＝決意・正語＝言葉・正業＝行為・正命＝生活・正精進＝努力・正念＝思念・正定＝瞑想）の教えの中に仏道精進を知る事ができ、「八葉蓮台・極楽浄土＝八葉の蓮華」は、その上の大日如来のご尊像を拝する事が出来る。

中書院；昭和41年落成。二つの茶室・庭園・当山に古く伝わる月の井・光聚庵（三笠宮妃殿下名庵（裏千家家元千宗室宗匠命名））。

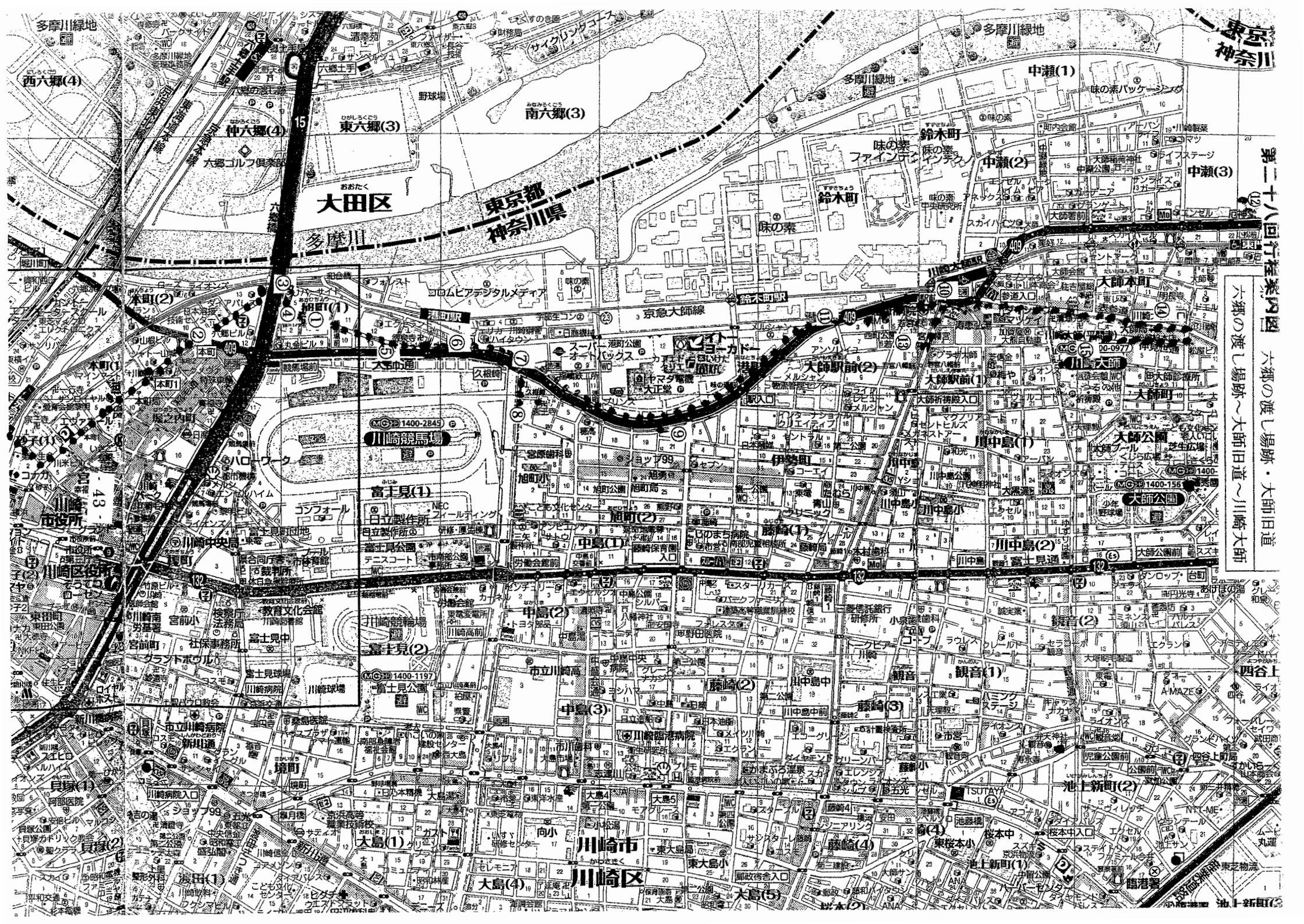
遍路大師尊像；昭和48年の弘法大師誕生1200年記念事業として建立。「新四国八十八ヶ所霊場」。

弘法大師道標（参詣者への道案内・従是弘法大師江之道・当初は川崎宿下手の土居付近玉川寄・の高さ171cm）

寛文3年（1663）建立，多摩川を渡って船場町（多摩川河床）に至り，本道標の指示に従って左折し，大師道へと歩いて行きました。本道標は，菱川師宣（和ノブ・安房の人・江戸初期浮世絵師坂本の挿絵を制作浮世絵の新領域を開拓・1658～1661）の「東海道分間絵図」（元禄3年＝1690刊）や「川崎宿船場町絵図」（明治2年，1765作図）さらに，享和年間（1801～04）に道中奉行が作成した「東海道文献述絵図」の中にも描かれており，歴史的にも川崎宿を代表する貴重な石造の記念物。（昭和63年，市指定重要歴史記念物）

「こうぼう大し江のみち」

瀋秀園（シンシュウエン・大師公園）；中国瀋陽市と友好都市5周年記念として開園した国内最大級の中国庭園，明・清代を代表する建築を再現している。



第二十八回行経案内図 六郷の渡し場跡〜大師旧道〜川崎大師

六郷の渡し場跡〜大師旧道〜川崎大師